

# 論文審査の結果の要旨

氏名 関山 健

「国際協調の妥協と変化のメカニズム」と題する本論文は、国際システムでの繰り返しの交渉における妥協の変化を理解するための枠組みを提示している。従来、国際協調を巡って総論では賛成するが、各論において反対するという状況にある場合、いったん利害の調整が行われ合意が成立すれば、各国とも合意からの離脱の誘因を持たないと多くの先行研究は指摘してきた。これに対し、本論文は、ゲーム理論の繰り返し男女の戦い(Battle of the Sexes:BS)分析から得られた示唆と事例分析から得られた知見から、現実の国際政治経済において最初の交渉が行われた後、その交渉結果を見直すことができる場合、利得構造に変化がなくとも最初の交渉で成立した合意は必ずしも安定的ではなく、妥協をする側が入れ替わることがありうることを指摘した。さらに、そうした協調方法について、利害対立がある二国間関係において、その時々いずれの政府が妥協するかは、「力」、「制度」、及び「共通意識」といった要因によって決まることを、事例分析を通して論じた。

本論文は、第1章序論、第2章繰り返しBSから得られる示唆、第3章大規模資金協力を巡る日中関係の事例－「制度」と「共通意識」による妥協、第4章商業捕鯨を巡る日米関係の事例－「力」と「制度」による妥協、第5章結論から構成されている。

第2章では、国際政治学分野で利用されてきたゲーム理論を展望した後、国際システムが機能している現代国際社会における交渉は、従来ほとんど省みられることがなかった「繰り返し男女の戦い」ゲームを利用することによってよりよく理解されることを指摘する。

第3章と第4章の事例研究では、「対中国大規模資金協力の是非をめぐる日中関係」と「商業捕鯨の是非を巡る日米関係」を扱っている。

第3章の事例においては、特に「制度」や「共通意識」によって、その時々において日本政府と中国政府が各々妥協してきたことが明らかにし、「繰り返し男女の戦い」ゲームから得られた示唆に基づいて、日本からの中国への政府開発援助において2008年北京五輪後にプロジェクト援助を中心とする円借款は終了したものの、無償資金協力は継続されている背景を探っている。さらに、第4章の事例においては、特に「力」や「制度」といった要因によって、その時々において日本とアメリカの政府が各々妥協してきたことを明らかにしている。特に、1982年に4分の3以上の賛成をもって商業捕鯨モラトリアムが可決されて以来、捕鯨を推進しようとする政府が国際捕鯨委員会で4分の3以上の支持を集められるような状況には至っておらず、商業捕鯨の再開への扉を閉ざしていることを、日本とアメリカの両政府の交渉を軸として明らかにし

ている。

関山氏の論文における国際交渉におけるゲーム理論の応用例では、モデル分析から得られる視座は、事例分析のための示唆を得る手掛かりとして利用されているに過ぎない。「繰り返し男女の戦い」のモデルから導かれる当事者の行動を、あくまで国際協調の妥協と変化に関する示唆を得るための手掛かりにとどめるよう意識している。また、事例分析においては、モデルの単なる応用にならないように、歴史的な個別性を見失うことなく、各々の政府の行動の背景を明らかにするように努めている。これにより、「繰り返し男女の戦い」モデルにより得られる当事者の行動と事例分析における当事者の機能的行動を組み合わせ、全体として国際協調と妥協の変化のメカニズムを理解しようとしている点は評価できる。

しかしながら、本論文にはいくつかの残された課題がある。「制度」ができるとき、当時の国際関係における「力」が影響しているのであり、個別に外生的に所与として扱ってよいかは意見の分かれるところである。さらに、安定的な「制度」の下で、2国の政策決定者のもつ非対称の知識の下で共通な情報がどのように「共通意識」を醸成するのかが問題となる。さらに、2つの事例とも、国際システムの中の繰り返しゲームとして捉えることに異論を唱える人は少ないと考えられるが、「中国への政府開発援助」の事例は2国間の円借款の問題であり、そこで扱われた「制度」はかなり不確かなものである。他方、「商業捕鯨」の問題は、国際組織を持つ「制度」であり、しかも多国間の協調問題も関連しているので、二者間関係を記述する「繰り返し男女の戦い」モデルで分析することの妥当性をより論証する必要がある。さらに、「繰り返し男女の戦い」モデル自体が、国際政治経済における交渉を理解するための方法論的個人主義という前提の限界を示しているようでもある。

いずれにしても、国際システムの中で繰り返し広げられる国際交渉を、「繰り返し男女の戦い」のモデルの視座から、ほとんどの国々が複合的な相互依存関係にある国際システムの中において、容易にはそのシステムから逸脱することはできない繰り返しゲームとみなし、その行動の選択範囲は、男女の戦いゲームの分析から得られるように、国際交渉は妥協と協調の変化の中にあると指摘したことは、他の著作にその類例はないと判断した。さらに、日本語、英語と中国語を駆使して第1次資料を調査した関山氏の資質も高く評価されるものである。

したがって、国際協力学のみならず、国際政治経済学や国際関係論の研究の今後の発展に資する論文であると評価し、審査委員全員一致で合格とした。